

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(15) : タテ系の張力と織機の型式5 : 地機

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	284
ページ	58-60
発行年	2004-11-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5217

無縦横 色とカタチのファイールドワーク

吉本忍

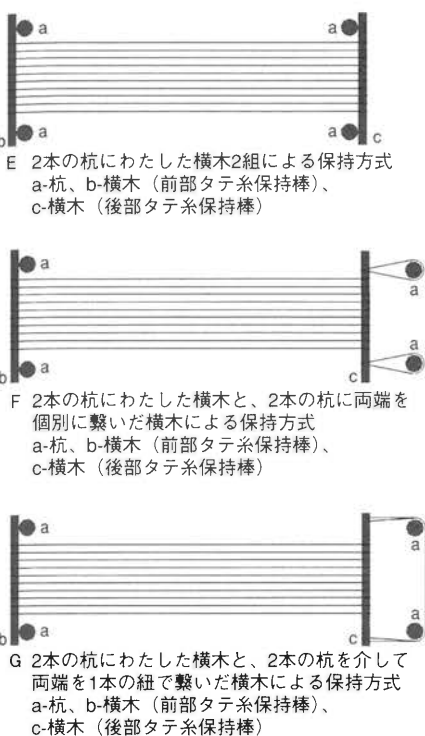
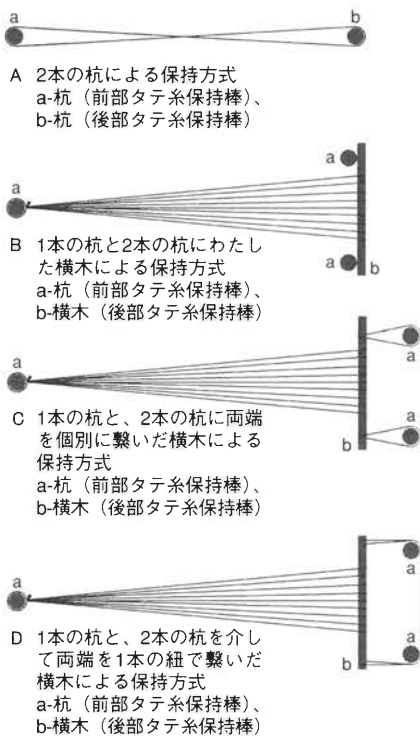
タテ糸の張力と織機の型式5

地機

大地が張力を付与している機

地機はタテ糸の両端を、それぞれ1本の杭、もしくは2本の杭にわたした横木に固定することによってタテ糸に張力を付与する型式の織機である。したがって、地機の構成部品のうちで杭は、タテ糸に張力を付与するために不可欠である。ただし、杭は地面に打込まれたものから、地機にかけわたされたタテ糸の張力は、実質的には杭が打込まれている大地によって付与されている。そうした地機にかけわたされたタテ糸の保持方式としては、これまでに図1のAからGに示した7種類を確認している。

図1 地機にかけわたされたタテ糸の保持方式



このような織機をこの連載で「地機」の名で紹介していることについては、以上のように大地が杭を介してタテ糸に張力を付与している型式の織機であることになっている。そしてまた、そうした地機が英語で一般に「ground loom」と呼ばれていることも同じ理由によっている。なお、わが国の伝統的な織機のうちに見いだされる腰機は、一般にいざり機、あるいは地機と呼ばれてきた。したがって、読者のうちには、わたしがこの連載で使用しているタテ糸の張力に注目した織機の分

類名称としての「地機」という名称と、わが国で伝統的に呼びならわされてきた「地機」という名称とを混同されるむきもあるかと思われる。もとより、わたしとしても混同しやすい名称を重複して使うことに抵抗がないわけではない。しかし、織機や機織り技術を世界的な視野のなかで分類し、考察するうえで、タテ糸の張力に注目した織機の種類名称として、大地が杭を介してタテ糸に張力を付与している型式の織機名称については、「地機」がもっとも適切であると考えている。そうしたことから、これまで、そして今後においても、わたしが使用する「地機」という名称は、わが国で「地機」と呼ばれてきた織機とは、まったく異なる型式の織機の種類であることをご理解いただきたい。

綜統固定式の地機

地機、すなわち大地が杭を介してタテ糸に張力を付与している型式の織機は、世界の広範な地域に分布している。これまでにそうした地機が存在を確認しているのは、西アジア、中央アジア、南アジア、東南アジア、東アジア、北東アジア、北アフリカ、中央アフリカ、マダガスカル、南アメリカであり、これらの地域のなかで、とくに中国の新疆ウイグル自治区から西アジアに至るシルクロードとその周縁地域（西アジア、中央アジア、南アジア、東アジア、北東アジア、北アフリカ、中央アフリカ、マダガスカル）には、地機の分布が集中している。また、それらの地域に分布する地機の多くは、開口具として固定式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持具1本をそなえているというきわだった特徴が認められる。したがって、固定式の綜統をそなえた地機が



写真1 アゼルバイジャン人の地機による機織り (イラン、ゲルデ村：1999年)



写真2 ウズベク人の地機による機織り (ウズベキスタン、カイラゴチ：1998年)

図2 輪状綜統固定式地機のタテ糸の開口と逆開口



a-輪状綜統 (固定式)、
b-開口保持具 (可動式)

集中的、かつ普遍的に分布するシルクロードとその周縁地域は、先月号で紹介した環太平洋を中心とした腰機文化圏と並び立つ、広大な地機文化圏としてとらえられる。そうしたことから以下ではまず、さまざまな地機のうちから、シルクロードとその周縁地域の多くの地機に認められる綜統の設置方式が固定式の地機について紹介する。

織物を織るには、綜統、あるいは綜統と開口保持具(中筒)といった開口具を使用してタテ糸の開口と逆開口をおこなない、その開口部や逆開口部にヨコ糸を通すばあいと、開口具を使わないで奇数列や偶数列のタテ糸を手ですくいながらヨコ糸を通していくばあがある。後者の開口具を使用しない織りの具体例としては、279号や280号で紹介したワラジや投石紐などの楕円状織物の織りなどがあるが、もとより、多くの織物は開口具を使用して織物を織ることが一般的である。ただし、わが国の高機や腰機をはじめとする織機を使った機織りでは綜統は可動式であり、われわれはともすれば機織りの基本運動のひとつである

綜統固定式の地機の開口具としては、すでに述べているように輪状綜統1枚と開口保持具1本がある。この点はわが国でいざり機や地機と呼ばれてきた伝統的な腰機の多くと共通する。ただし、綜統固定式の地機では輪状綜統が固定されていることから、図2に示したように輪状綜統の先にある開口保持具を手前に引き寄せたり、遠ざけたりすることによって、タテ糸の開口と逆開口がおこなわれる。なお、輪状綜統を固定するためには、綜統棒の両端を上から紐で引つ張って固定する方式と、綜統棒の両端の下に支台を置いて下から支えて固定する方式がある。このうち輪状綜統を上から引つ張る方式では三脚の使用(写真1・写真4)が一般的であるが、平行棒の



写真3 ボンダ人の地機による機織り (インド、ムドゥリパダ：1979年)

タテ糸の開口運動は、常識的に綜統を動かすことによってタテ糸の開口と逆開口をおこなうことと思いがちである。しかし、そうした常識は日本における常識であって、シルクロードとその周縁地域に分布する地機の多くは、綜統が固定されていて、タテ糸の開口と逆開口をおこなうさいに綜統が動くことはない。

綜統固定式の地機の開口具としては、すでに述べているように輪状綜統1枚と開口保持具1本がある。この点はわが国でいざり機や地機と呼ばれてきた伝統的な腰機の多くと共通する。ただし、綜統固定式の地機では輪状綜統が固定されていることから、図2に示したように輪状綜統の先にある開口保持具を手前に引き寄せたり、遠ざけたりすることによって、タテ糸の開口と逆開口がおこなわれる。なお、輪状綜統を固定するためには、綜統棒の両端を上から紐で引つ張って固定する方式と、綜統棒の両端の下に支台を置いて下から支えて固定する方式がある。このうち輪状綜統を上から引つ張る方式では三脚の使用(写真1・写真4)が一般的であるが、平行棒の



写真4 カシュカイ人の地機による機織り (イラン、フィールズ・アーバード：1999年)

上にわたした横木を使用する例や、弓状の棒を使用する例(写真2)などもある。また、輪状綜統を下から支えるばあいの支台としては、Y字状や逆Y字状の木をはじめとして、石、レンガ、空き缶などが使われている。



写真8 ベトナム（キン）人の複合式開孔板綜統をそなえた地機によるゴザ織り（ベトナム、ホイアン：2002年）



写真6 シリア人の回転板綜統をそなえた地機による機織り（シリア、ダマスカス：2004年）



写真9 アゼルバイジャン人の無綜統の地機によるゴザ織り（アゼルバイジャン、サトルバ村：2004年）



写真7 ケチュア人の地機による機織り（ペルー、ピトゥマルカ：1999年）



写真5 ウズベク人の細幅織物用地機（ウズベキスタン、カイラゴチ：1998年）

で綜統固定式の地機やその他の織機の調査を終えて帰国したばかりである。

綜統可動式の地機

インドのムドゥリパダで地機を調査して以来、わたしは世界各地でさまざまな地機を見てきた。シルクロードとその周縁地域で使われている地機の多くは、すでに述べているように輪状綜統が固定されているが、それらの地域においてもイランのカシュカイ人やウズベキスタンのウズベク人のもとで、例外的に輪状綜統が可動式の地機の存在を確認している。このうちカシュカイ人のもとでは、開口具として4枚の可動式の輪状綜統をそなえた地機で綾織組織の紋織物が織られている（写真4）。また、ウズベク人のもとでは、開口具として可動式の輪状綜統1枚と可動式の開口保持棒1本をそなえた地機でタテ畝組織のタテ糸浮織（昼夜織）技法による細紐が織られている（写真5）。さらに、輪状綜統以外の綜統をそなえた地機としては、イランのパフチアリ人、シリアのシリア人（写真6）、ゲルジアのゲルジア人のもとで可動式の回転板綜統をそなえた地機の存在を確認している。

一方、シルクロードとその周縁地域以外の地域、すなわち南アメリカと東南アジアには、いずれも綜統可動式の地機が分布している。このうち南アメリカではペルー・アンデスでケチュア人が輪状綜統可動式の地機を使用している（写真7）。また、東南アジアの綜統可動式の地機としては、27号で紹介した複合式開孔板綜統をそなえた地機が、ベトナムのキン（ベトナム）人（写真8）、ラオスのラオ人、カンボジアのクメール人のもとでゴザを織るために使われている。そしてさらにラオ

スのクム人のもとでは輪状綜統をそなえた地機が細幅織物専用機として使われている。

無綜統の地機

これまでは地機について、綜統固定式の地機と綜統可動式の地機を紹介してきたが、地機には、それらの綜統をそなえた地機のほかに綜統のない地機も少なからず見いだされる。そうした無綜統の地機としては、イランのアゼルバイジャン人が投石紐を織るために使っている地機、インドのインド人、イランのギーラーン人、アゼルバイジャンのアゼルバイジャン人（写真9）やタリシユ人、エジプトのエジプト人などがゴザを織るために使っている地機などをこれまでに確認している。また、実物は確認できていないが、24号で紹介したインドネシアのジャワ人のもとでランブの芯や手綱などの被覆材となる管状織物を織るための織機も地機のうちには包括される織機であったと考えられる。

（国立民族学博物館民族文化研究部教授）

よしもと・しのぶ

文献

JASPER, J.E. and MAS PIRANGADI

1962年 *De Inlandsche Kunstnijverheid in*

Nederlandsch Indië II, De Weefkunst.

De Boek & Kunstindrukkerij v/h Mouton & Co.

吉本 忍・柳 悦州

2002年「シルクロードの織機」、シルクロード

学研究13「シルクロード織機研究」、シルクロード

学研究センター。

吉本 忍

1987年「手織機の構造・機能論的分析と分類」

『国立民族学博物館研究報告』12巻2号。

2003年「擦文文化期の織機と織物―栄浦第2遺

跡出土の「擦文の綜統」をめぐって―、『アイヌ文

化の成立 宇田川洋先生華甲記念論文集』、北海道

出版企画センター。